國學院大學学術情報リポジトリ

折口信夫の民俗学：柳田國男からの示唆：特集日本民俗学の展望を拓く：伝承文学専攻開設二十五周年記念

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小川, 直之, Ogawa, Naoyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000262

折口信夫の民俗学
—柳田國男からの示唆—

小川直之

一、『古代研究』民俗学篇第二「追ひ書き」から

國學院大學の学統の一つである民俗学の特集が編まれるにあたって、その学統形成の標となった折口信夫と柳田國男の学問を取り上げ、両者の研究がどのように交錯しているのか、具体的には、折口が民間伝承研究・民俗学による新たな国学の樹立をめざすなかで[1]、柳田の研究から得たと思われる示唆を整理しておくのが本稿の目的である。

折口信夫は國學院大學大学部国文学科を卒業後、大正九年（一九二〇）七月の信州採訪旅行からの帰宅後、九月九日に三十四歳で國學院大學専任講師に就任し、翌大正十年（一九二一）の沖縄採訪からの帰宅後九月三十日に教授となっている。國學院大學専任講師になる以前に学内で郷土研究会を立ち上げて、学生たちに民俗学の指導を始めている。この会では大正九年九・十月に柳田國男を招き、二回にわたって「フォクロアの範囲」の講演をしてもらっている。柳田は、戦後の昭和二十六年（一九五一）五月に大学院の神道学専攻設置にあたり、理論神道学を担当する教員として本学教授に就任し、大学院で講義を行い、さらには昭和三十年（一九五五）の日本文化

研究所設立にも尽力している。柳田は教授就任以前から、先の郷土研究会だけでなく、折口らが設立した國學院大學国文学会で大正十三年（一九二四）十一月二十七日に「俳諧とフォクロア」を講演するとか、國學院大學方言研究会が昭和十三年（一九三八）に柳田の『禁忌習俗語彙』を出版するなど、國學院大學とは密接な関係を持ちつづけている。本学の学統形成に柳田をあげる所以はこうした経緯に拠る。

　國學院大學の民俗学が「国学」という学問の流れのなかで形づくられたことは言うまでもなく、折口は、昭和五年（一九三〇）六月刊の『古代研究』民俗学篇二の「追ひ書き」の中で自分の研究は「新しい国学」の樹立を目指すもので、それは柳田國男に導かれてのことであるという。この「追ひ書き」は、『古代研究』をまとめているときの自分の境遇から始まり、学生時代のことと、目指す学問手法などを述べている。その内容を具体的に検証してみると、折口はありのままを綴っていて、民俗研究の足取りや思いがよく現れている。

　本稿で取り上げることとの関連では、折口は自分の研究について次のようにいう。

　学問上の恩徳を報謝するためには、柳田國男先生に献るのが、順道らしく考へないではない。でも、その為には、もつと努力して、よい本を書いてからにせねばならぬ気がする。其ほど、先生の学問のおかげを、深く蒙つてゐるのである。先生の表現法を模倣する事によつて、その学問を、全的にとりこまうと努めた。先生の態度を鵜呑みして、其感受力を、自分の内に活かさうとした。私の学問に、若し万が一、新鮮と芳烈とを具へてゐる処があるとしたら、其は、先生の口うつしに過ぎないのである。又、私の学問に、独自の境地・発見があると見えるものがあつたなら、其も亦、先生の『石神問答』前後から引き続いた、長い研究から受けた暗示の、具体化したに過ぎないのである。（「全集」3）

　随分とへりくだった言い方と思える部分もあるが、重要なのは「私の学問に」以降の一文であろう。折口は、柳田の『石神問答』前後以後の研究からの暗示に基づいて、自分の研究を進めたと言っているのであり、このことを次項以降で具体的にみていくことにする。

　その前に、折口が言う「先生の『石神問答』前後から引き続いた、長い研究」から検討しておくと、柳田は明治四十三年

（一九一〇）に『石神問答』と『遠野物語』を出版している。その前年明治四十二年（一九〇九）には宮崎県椎葉村の狩猟伝承などを、当時の村長中瀬淳の手記を含めてまとめた『後狩詞記』も刊行している。そして、明治四十三年（一九一〇）からは学術雑誌である『歴史地理』『東京人類学雑誌』『考古学雑誌』『斯民』などに地名や伝説、山の神等の民間伝承に関する論考の発表を始め、明治四十二・四十三年（一九〇九・一〇）には農政学から民間伝承の研究へと軸足を移している。[2]

明治時代末から大正時代初めにかけての柳田の民間伝承研究には、たとえば明治四十四年（一九一一）の『人類学雑誌』二七巻一号・二号に発表した「踊の今と昔」（一）（二）、同二七巻六号・七号、二八巻二号の「「イタカ」及び「サンカ」」（一）（二）（三）、大正二年五月（一九一三）の『国家学会雑誌』二七巻五号に執筆した「所謂特殊部落ノ種類」[3]などがあり、後述するように折口はこれらから示唆を受けているのではないかと思える。折口の蔵書には「踊の今と昔」「「イタカ」及び「サンカ」」が掲載されている巻はないが、明治四十四年（一九一一）十二月には東京人類学会に入会している。『東京人類学雑誌』の蔵書は、入会前の明治二十年（一八八七）の三巻二一号から昭和五年（一九三〇）五月の四五巻九号まで断続的にあり、先の柳田論文を読んでいないとは言い切れない。また、柳田は大正二年（一九一三）三月に高木敏雄と雑誌『郷土研究』の発刊を始め、論述の大半をこの雑誌に掲載するようになり、その創刊号から「巫女考」「山人外傳資料」を連載している。折口は『郷土研究』には一巻一〇号の「三郷巷談」から投稿を行っていて、この学術誌は確実に購読していた。

折口が、柳田の民間伝承研究が『石神問答』前後以降に始まっていると認識しているのは的確であり、折口の民間伝承への注視と、これによる研究も明治時代末に始まり、大正時代初めからその成果を発表し始めるといえよう。

しかし、折口は「追ひ書き」では、

> 今では、先生の益倦まぬ精励が、我々の及ばぬ処までも、段々進んで行つて居られ、新しく門下に参じる人たちも、殖えてゆく一方である。或は心理学的に、社会学的に、日々新しい研究法を加へて行かれる姿がある。発足点から知つた私自身は、一次・二次のものに、固執してゐるかも知れない。使徒の中、最愚鈍な者の伝へた教義が、私の持する民俗学態度かも知れない。併しながら、私は先生の学問に触れて、初めは疑ひ、漸くにして会得し、遂には、我が生

くべき道に出たと感じた歓びを、今も忘れないでゐる。（「全集」3）

と、心境を吐露している。折口は、これを書いた昭和五年（一九三〇）時点ではその後の柳田の心理学的、社会学的研究よりも、明治時代末から昭和初期までの、特定地域の民間伝承叙述や、前近代資料の利用と各地の民間伝承の比較による民俗の歴史的研究にこだわっていて、柳田の教えを伝える者の中では、私の民俗学はもっとも愚かなものであるかもしれないと言っている。こうした思いがあるものの、柳田の学問に触れて「我が生くべき道に出たと感じた歓びを、今も忘れない」という。柳田の学問は、折口にとっては、研究の方途に苦悩するなかでの光明だったのである。

それでは、折口が「追ひ書き」でいう柳田國男の一次・二次の民間伝承研究からの暗示とは何であるのかといえば、それは「一次」は「民間伝承」を研究対象にし、それを叙述するという視点、姿勢であり、「二次」はこれによる明治時代末、その後の『郷土研究』誌上などでの、日本の文化や社会の歴史的研究と考えられる。折口にとっては、具体的には後の大正十四年（一九二五）の「古代生活の研究」にいう「生活の古典」という指標による伝承叙述と、被差別村落や社会的下層民への注視、「標山」・「依代」理論や「まれびと」論などの定立といえよう。

二、「三郷巷談」と柳田國男の初期論文

折口の民間伝承研究・民俗学は、大正二年（一九一三）十二月の『郷土研究』一巻一〇号に「三郷巷談」を発表するのが最初である。これは折口が生まれ育った大阪の民間伝承を叙述したもので、『郷土研究』一巻一〇号の表紙には本号要目として「三郷巷談」があげられ、「資料及報告」欄に掲載された四頁余りの資料報告である。この後、大正三年（一九一四）三月の『郷土研究』二巻一号、やや時を経て大正五年（一九一五）十月の『郷土研究』四巻七号に「三郷巷談」続編が掲載されている。さらに『郷土研究』休刊後は折口が主宰する大正七年八月創刊の『土俗と伝説』一巻一号、同年十月の一巻三号に、膝折武助の名で「三郷巷談」の続きを掲載する。「三郷巷談」は都合五回にわたる二四話の発表となる。自らが記した昭和十二年（一九三七）の「自撰年譜」（二）では、大正二年（一九一三）に「三月、柳田先生により、『郷土研究』創刊。「三郷巷談」―採訪記―を投稿[4]」と、「三郷巷談」に「採訪記」という註記を

付けている。これは実地の民間伝承に視点を向けるという、新たな研究法への取り組みを強調したと理解できる。

ただし「三郷巷談」は、昭和五年（一九三〇）六月刊の『古代研究』民俗学篇二への収録は、連載の二回目である『郷土研究』二巻一号以降の「三郷巷談」にとどめている。初回である『郷土研究』一巻一〇号掲載の「三郷巷談」は除外している。それは、記述内容に具体的な地名を明記した被差別集落の伝承がいくつも含まれているからで、これに対する配慮があったと思われる。大正十一年（一九二二）にはその解放運動を行う全国水平社が組織され、昭和初期には活動が展開しており、差別解放の意図からであろう。

大阪木津の折口家は、生薬・雑貨を商う家で、信夫の祖父造酒ノ介の代から医業も行うようになった。飛鳥からの聟養子であった造酒ノ介は診療においては、被差別集落の者も分け隔てなく診療し、被差別集落からの信頼が篤かったという。「三郷巷談」と同じ頃の大正三年（一九一四）三月に『不二新聞』に連載した自伝風小説の「口ぶえ」（「全集」27所収）には祖父の診療の様子が描かれている。そこには「十八年の夏、これら病が流行した。医者であつた祖父は土地の人々のために、夜の目も寝ないで奔走してゐた。……今度は自身で死ななければならぬ病にとりつかれた。つつしみ深かつた人が、被せても被せても蒲団を脱いでのたうつて苦しんだ。祖父の死んだことが聞えると、近く、穢多村から、ぞろぞろと軒さきへ来てわあわあ泣いた。『先生さんが死にやはつたら、わしら見たいな者は、これから病気になつても誰も見てくれる人はない。』と大声あげて哭いた者もあつたさうである」とある。事実と思われるこの叙述からは、信夫にとっても被差別集落の人たちは、決して差別する対象ではなかったはずである。しかし、会員にしか渡らない雑誌『郷土研究』とは違い、書冊として一般に流通する『古代研究』にはそれなりの配慮が必要だったのである。

「三郷巷談」は、柳田の著作でいえば『遠野物語』と同じように、伝承を一話ずつ記す方式をとっている。巷談に便宜的に番号を付して内容をあげると、①平野の御霊神社氏子は玉茎が曲がっているという身体的伝承と、その類例として東区難波の八坂神社、堺市の天満宮、河内の道明寺天神の氏子についての伝承をあげる。[5] ②「ぼおた」と呼ぶ明治初年までの嫁盗み習俗とその経済的事由、③被差別集落の伝承である「ゑつたのこきわけ」、④「一里ゑつた夙三里」の成句とその集落のあり方、⑤「夙村の人間は肋骨が一本足らぬと伝えてゐる」という身体伝承、⑥「夙村の商売」、⑦北河内郡の「出郷」の性格、⑧「北

河内辺りの夙村」、『郷土研究』一巻一〇号掲載の最後は、⑨被差別集落の衰退で、この項の記述からは豊能郡や北河内郡なども回っていることがうかがえる。

大正三年（一九一四）三月の『郷土研究』二巻一号掲載の「三郷巷談」は、⑩「もおずしゃうじん」、⑪「あはしま」の二項目である。①から⑨を投稿し、⑩⑪は改めての投稿なのか、⑪までを投稿したものが分載されたのは不明であるが、⑩「もおずしゃうじん」は、泉北郡百舌鳥村百舌鳥（現・堺市）が伝える万代八幡宮に関する正月三が日は肉食を忌む精進の風習。⑪「あはしま」は、淡島信仰の伝承を住吉明神と関連づけて取り上げ、住吉明神の妻である淡島明神の白血長血の穢れ伝承を記す。

次の大正五年（一九一六）十月の『郷土研究』四巻七号掲載の「三郷巷談」は、掲載年次からは改めての投稿と考えられ、⑫「南ぬけの御名号」という木津七軒の旧家と雲雀家が持つ名号の伝承、⑬「算勘の名人」というソロバンで呪術を行う漂泊者伝承、⑭「樽入れ棒はな」という木津での祭りや婚礼に際して行う若者組の振る舞い、⑮「執念の鬼灯」は母から聞いた「五大力恋（こいのふうじめ）緘」という歌舞伎狂言に関する伝承。[6] ⑯「六部殺し」でも同様に演劇世界が巷談として流布したことをあげている。それは「熊野八鬼山の順礼殺し」で、文化十二年（一八一五）に中座で初演された「敵討浦朝霞（かたきうちうらあさがすみ）」の「紀州八鬼山峠の場」が前提となっている。『郷土研究』掲載の最後が⑰「日向の炭焼き」で、これは日向の炭船が難波で子どもをさらっていくという伝承で、いわば都市の神隠し伝説である。

『郷土研究』休刊後、折口は民間伝承研究の雑誌として大正七年（一九一八）八月に『土俗と伝説』を創刊し、創刊号から膝折武助のペンネームで「三郷巷談」を続ける。その最初が⑱「しゃかどん」で、大阪府三島郡佐位寺のある一族がもつ身体的特徴の伝承。身体的特徴については、①で氏神との関係で氏子がもつ身体的特徴、③⑤では被差別集落の身体的特徴に関する巷談をあげ、⑱では一族がもつ皮膚の色の巷談をあげており、折口の身体へのこだわり、就中その異常性への関心がうかがえる。⑲夙村の集落が周りに「へ」の字形の濠のような池をもつこと、⑳「ゆんべ」という言葉を冒頭にもつ歌二例の紹介。ここでは『郷土研究』に掲載された川村杳樹（柳田國男）の「西行橋」、南方熊楠の「紀州俗伝」との類似を指摘する。紹介する二例の歌とも末の伝承がないが、これは「可なりな老人に聞いても知らぬ」と、自らの採訪資料であることを明示している。㉑「うしはきば」は馬捨て場の伝承で、穢多、皮、肉のことを

いい、この場所は「わりあひに神聖な処と考へられてゐる様である」と解釈する。「三郷巷談」の連載の最後は大正七年（一九一八）十月の『土俗と伝説』一巻三号で、㉒「名字」は、木津や難波の名字の由来伝承、㉓「人なぶり」は人をなぶるさまざまな成句などの言語伝承、最後の㉔では十年ほど前から子どもたちの間に流行っている歌[7]で、ここでは自己体験に基づく二十年前と、十年前からの比較を行っている。

「三郷巷談」の内容についての分析は、すでに別稿で行っているので詳しくはこれを参照して欲しいが[8]、『郷土研究』一巻一〇号にこれが掲載されると、次の一一号には柳田國男が赤松某の名で「氏子の特徴」という短文を載せ、「第十号の三郷巷談の中に、大阪平野町御霊神社の氏子、男の徴の尖が曲つて居る、其理由は不明云々。此は冗談で無く面白い話である。自分は今までに此例を二つ三つ聞いて居るのみならず、打明けた処が自身亦其特徴ある氏子の一人である。」といい、さらに最後の方で「唯土俗学上の問題として永く我々に残るのは、何故に神の石（ママ）が斯な隠し処に中つたのか（イ）、氏神の傷が何故に末々の氏子にまで影響を与へたのか（ロ）、以上の二点である。折口さんのやうな注意深い人生の観察者で無ければ、いつ迄も此疑を解き得る人はあるまいと思ふ」と、高い評価をし、人物としては未知の折口を「注意深い人生の観察者」と褒めている。さらに柳田は、最晩年の『故郷七十年』で「嫁盗み」を取り上げて「三郷巷談」の「ぼおた」について、折口がその理由を家の経済性に求めていることに高い評価を与えている[9]。柳田にとって「三郷巷談」はよほど印象深い投稿であったのである。

「三郷巷談」の「三郷」については、柳田は『故郷七十年』で「大阪の木津・難波・今宮の三郷[10]」と理解し、池田弥三郎は『私説折口信夫』の「しのぶかのぶおか」で、「三郷は「灘三郷」のサンゴウであろう。いわば生粋の大阪というべき地域であって、その原稿の内容は、大阪の町住みの生活における民俗の報告であった」という[11]。「三郷」は確定しくにいが、これに取り上げている伝承からは、所謂「大坂三郷」である北、南、天満をやや拡大して木津・難波から西成区玉出・津守までを舞台に、摂津・河内・和泉の三国にわたる伝承を取り上げ、都市における民間伝承を叙述しているといえる。

折口信夫の「三郷巷談」の叙述方法は、前述のように柳田の『遠野物語』と同じように、伝承をトピックとして一話ずつ並べていくというもので、明らかに『遠野物語』に倣ったといえる。大阪という都市における民間伝承ということでは、「三郷巷談」は、都市の社会史を構築する上での口頭伝承・口承文芸

の役割を暗示してくれているのであるが、柳田國男の論述との関係でいえば、最初の掲載である大正二年（一九一三）十二月『郷土研究』一巻一〇号の「三郷巷談」には、多くの被差別集落の伝承が含まれていることが注目される。医師であった信夫の祖父造酒ノ介は被差別集落の者からの信頼が篤く、家にはこうした人たちが出入りし、信夫もこの人たちと接していたであろうし、「自撰年譜（一）」の明治三十二年（一八九九）の項には、天王寺中学校の通学には「通学距離二十町余。道、江戸時代以来の貧窮街長町裏・家隆塚と伝へる夕陽ヶ丘・勝曼院・巫子町を通る」[12]と記している。通学路の「江戸時代以来の貧窮街長町裏」は、スラム街としてよく知られたところで、ここは近世大坂では非人集落であった天王寺垣内、鳶田垣内、道頓堀垣内、天満垣内の四ヶ所垣内が、後に拡大してできた町である。

こうした家や少年期の体験は、たとえば「ほかひびと」から「まれびと」論へとか、「ごろつきの話」（『民俗芸術』一巻八・九号、昭和三年、全集3所収）などからわかるように、折口の学問的な視点、分析概念の定立に大きな影響を与えている。このように考えると、初めに述べたように、柳田國男が明治四十四年（一九一一）の『人類学雑誌』二十七巻に連載する「踊の今と昔」（一）から（五）、二七巻六号・七号、二八巻二号に発表した「「イタカ」及び「サンカ」」（一）（二）（三）、大正二年（一九一三）五月の『国家学会雑誌』二七巻五号掲載の「所謂特殊部落ノ種類」は、これらを読んでいた確証はないが、動向としては「三郷巷談」の内容に繋がる部分がいくつもあり、何らかの影響関係が予測できる。また、「所謂特殊部落ノ種類」と「「イタカ」及び「サンカ」」は、ともに折口の「ほかひびと」・「まれびと」論や芸能史研究にも繋がる内容を含んでいる。

三、柳田「依坐」「神代」論と折口「標山」「依代」論

折口の論文である「髯籠の話」が『郷土研究』三巻二号に掲載されるのは、大正四年（一九一五）四月であった。この論文で折口は、「標山」という神降臨の場についての理論と、降臨する神が目印とし、依り憑く「依代」「招代」の存在を説く。術語を立てての論述で、折口の「標山」「依代」論は、この後「髯籠の話（承前）」（大正四年五月）、「盆踊りと祭屋台と」（大正四年八月）、「稲むらの陰にて」（大正五年六月）、「依代から『だし』へ（髯籠の話の三）」（大正五年十二月）、「幣束から旗さし物へ」（大正七年八月）、「だいがくの研究」（大正七年八月）、「幣束から旗さし物へ」（下）（大正七年九月）、「まといの話」（大

正七年十月）、「だいがくの研究」（二）（大正七年十月）へと続いて展開している。いうまでもなく「標山」「依代」論は、これらを総体として扱う必要がある。

折口の「依代」論がどのように展開しているのかは、ここでは扱わないが、重要なことは「標山」と「依代」は異なる論理立てによって成立しているものの、これらを結び付けながら神降臨の信仰を説明していることである。前述のように「標山」は神降臨の場、「依代」は神憑依の物実であり、「盆踊りと祭屋台と」でも練り物の山車は「標山」、これに立てたつくりものが「依代」とし、「稲むらの蔭にて」では稲むらが「標山」で、古くこれに立てたススキが「依代」であるという。両者は一体的であっても、区別して論じているのである。

そして、この区別されるべき両者は、「幣束から旗さし物へ」では、「神招ぎ代（ヨロ）の幣束なる幣が、神の依り現す（タヽ）場の（ニハ）標（シルシ）となり、次いでは、人或は神自身が、神占有の物と定めた標（シメ）ともなり、又更に、神の象徴とさへ考へられる様になつたのである」（「全集」2）という論理を示している。つまり、論理的に区別される「標山」と「依代」の交錯も考えているのであり、所謂折口「依代」論は、その理論応用にあたっては「標山」と「依代」を意識的に区別しつつ、一体的に捉える必要がある。[13]「髯籠の話」と、その後の先の一連の論文は「標山」と「依代」論を分けながら、あるいは一体化させながら進展させているのであるが、従来の所謂折口「依代」論を検討する論文では、「標山」論がほとんど意識されていないように思われる。[14]

折口の「髯籠の話」については、ここで提示された理論をめぐって、柳田國男との間にプライオリティーの問題が取り沙汰されてきた。それは「髯籠の話」の『郷土研究』への掲載をめぐってのことで、これを最初に取り上げたのは池田弥三郎である。池田はこの論文は大正三年（一九一四）に伊勢清志に口述筆記させて投稿したことと、柳田が「髯籠の話」の文体だけではなく、「一」の初めの方にある「尾芝氏の柱松考（郷土研究三の一）もどうやら此に関聯した題目であるらしい」という一文と、「髯籠の話」（承前）の最後にある「月見の座」の部分に手を入れているのではないかと推測し、編集を行っていた柳田が自分の「柱松考」を先に三巻一号に載せ、「髯籠の話」を次の号にしたと暗示している。[15]

理論提示のプライオリティーに関わるのであるが、何故「柱松考」を先に掲載し、「髯籠の話」を次号にしたのかを考えると、「柱松考」で言っているのは、先の折口の「標山」「依代」論でいえば、前者の「標山」のことであり、柳田はこれにこだわり

をもったのではないかと思う。[16]

『郷土研究』三巻一号（大正四年三月）に尾芝古樟の名で掲載する「柱松考」は、その前の大正二年（一九一三）十二月十七日に東洋協会で「柱松考」と題した講演が行われている。その内容は『郷土研究』一巻十一号（大正三年一月）の「雑報」に次のようにある。

> 柱松考　十二月十七日の晩の東洋協会講演会で、我社の柳田が見出しの如き話をした。朝鮮の寺院に残つている刹柱、満州民族中の索木は、支那の華表と恐くはもと同一系統のもので、日本では諏訪其他の祭にて立てる柱が之と起原を同じくするものらしい。高燈籠又は柱松は、旗鉾又は祭礼の幟と趣旨に於て差別は無く、何れも最初は地を画して清浄神聖を保持する標木即ちツクシであつたらうと云ふのが結論であつた。挙げられた多数の実例は主として関東奥羽のものが多く、西部日本のものが少なかつた。

つまり「柱松」は、清浄神聖な場を保持するための標木であるといい、これは折口の「標山」論に該当する。『郷土研究』三巻二号に掲載された「髯籠の話」に続く誌面には、「編者申す」として、投稿の書簡体の文章を改めたこと、「十数句を削った」ことの後に「柱松考の著者は髯籠の問題には論及せぬ由である。柱に関して両考に相異がありとすれば、読者として却つて興味の多いこと」と、わざわざことわりを入れている。ここに言う「編者」は柳田であり、「柱松考」の尾芝（柳田）は、「髯籠の問題」つまりは「依代」には論及しないが、「柱」つまり「標山」については考え方が違う、と言いたいのであろうか。[17]

いずれにしても「標山」「依代」理論に関しては、折口と柳田が交錯しているのである。ただし、折口がいう日本の神信仰に「依代」が存在することの発見は、その術語は異なるが、柳田の方が先である。それは、大正三年（一九一四）六月の『郷土研究』二巻四号掲載の川村杳樹（柳田國男）「片葉蘆考」には、「神が薄の葉に召して降られたと云ふのは、必しも初度の勧請のときでは無く、年々の祭に此物を以て神の依坐としたものらしい」、「薄を神代（かみしろ）とする由来の久しきことを示して居る。此が即ち片葉の蘆の真の根原かと自分は思ふ」、「此等は何れも蘆や薄の一本に神が託して往来すると信じた例で、手草の起原も此外にはあるまいと思ふ」とあるからである。ここでいう「依坐」「神代」が折口の「依代」に該当する。

折口の「依代」論は、標山の喬木を第一義とし、これが後に

「人作りの柱・旗竿など」に変化したり、標山の「依代」である喬木に幣束を付けて「よりしろ」としたりすると、「依代」と「よりしろ」を使い分けている。「髯籠の話」の「三」では、

地祇・精霊或は一旦標山に招ぎ降した天神などこそ、地上に立てた所謂一本薄（ヒトモトスヽキ）（郷土研究二の四）、さては川戸のさゝら荻にも、榊（サカキバ）葉にも、木綿（ユフ）しでにも、榊（シキミ）の一つ花（一本花とも）の類にも惹かれよつたであらうが、青空のよきへより降り来る神に至つては、必何かの目標を要した筈である。（「全集」2）

という。天空の神が依り憑く「依代」と、地祇・精霊と標山に降りた神が依り憑く「よりしろ」と、表記をかえて区別している。さらに「依代の思想」に拠るものとして式神の馬牛の偶像、神殿の鏡、位牌などをあげており、「依代」を三種に分けている。右の引用文の「一本薄（郷土研究二の四）」は、柳田の「片葉蘆考」のことで、柳田がいう「依坐」「神代」は、折口の場合は精確には「よりしろ」ということになる。

柳田がいう「依坐」は、古典語としては「寄坐」「尸童」「憑子」と表記され、近世の『和訓栞』は「依坐」と記している。「神代」は、近世の随筆に使用例はあるが、古典語としては現時点ではこの表記は確認できてない。こうしたことからは「依坐」「神代」は柳田の術語と考えてよさそうで、これらは折口の「依代」と表記上も極めて近似していることが注目される。

柳田は「片葉蘆考」に先だって、『郷土研究』一巻二号の川村杳樹「巫女考」で、狂人が持つ竹枝、能の狂女物の扇子などを下げた笹などは、謡曲の歌占が手に持つ短冊を付けた小弓とともに神を招く一用具といい、『郷土研究』一巻五号の川村杳樹「オシラ神」でも、「玉串の最初の思想は生樹の清い枝に神霊をして依らしむるに在つた」「手に取つて降神の具とする御幣なるものの、以前の形は則ち手草で、其又根柢を為すものは神霊が樹木に宿ると云ふ信仰である」と指摘している。

このように見て来ると、折口の「依代」論は、『郷土研究』誌上での柳田の「依坐」「神代」からの示唆があったと考えるのが妥当である。[18] ただし、折口の「標山」「依代」論は、先にあげたように「盆踊りと祭屋台と」以降、日本の文化や歴史過程にみえる山車、稲積み（稲むら）、旗指物、切籠灯籠、目籠等など、類化性能によって同類のものへと分析を広げる。そして、その形象を指標としてこれらの変遷を説くというように、独自の展開を遂げている。

術語としては、柳田のいう「依坐」「神代」は定着せず、折口の「依代」「招代」が一般化し、現在ではこれが多くの分野で用いられるとともに、この術語の提示者が誰であるのかも言われなくなっている。「髯籠の話」で折口が木津のダイガクの伝承をもとにした、しだれた髯籠は太陽神の表象であるという主張は、その後には折口自身も論じなくなる。

折口は一つ二つの民俗事象から分析概念としての論理―たとえば木津のダイガク伝承から太陽神の表象としての「依代」―を立て、これに基づいて類例を手繰り寄せて検証を行っていくという方法をとる。こうした方法は「依代」の場合だけではないが、髯籠を太陽神の表象とみる論理立ては、結果的には失敗に終わっている。

柳田の「片葉蘆考」「柱松考」、折口の「髯籠の話」と同じ時の『郷土研究』誌上では、三巻六号に尾佐竹猛が「能登の龍燈伝説」を寄せ、南方熊楠は三巻七号に「龍燈に就て」、三巻八号に「龍燈に就て（続）」、三巻九号に「龍燈に就て（完）」、三巻一〇号に「龍燈補遺」を発表している。柳田や折口と同類のものが取り上げられ、南方は「龍燈に就て（完）」（大正四年十一月）で「盆燈籠や人作の龍燈は、原と其火の光を仮りて神仏の勢威を助成し死人の冥福を修する信切から起つた者」と結論づけ、折口とは異なる観点から論ずるなど、この議論は活況を呈している。

この項の最後に柳田の論考を加えておくと、昭和五年（一九三〇）十月に、池上隆祐が主宰する雑誌『郷土』創刊号に寄せた「しだれ桜の問題」[19]では、しだれ桜の存在は、「墓地や行旅死亡者を埋めた場処を標示すべく、特に枝垂れた桜の若木を持つて来て栽ゑたといふことも、単に其土地が常用に供すべからざる一区画なることを人に知らしめる目的以外に、人間の魂魄も亦蒼穹を通つて、祭られに来るものと信じて居た痕跡とも想像し得られる」と、「依坐」「神代」という術語は使ってはいないが、折口の「標山」「依代」論と同様な考え方を示している。[20]

四、「まれびと」論

折口が提示した理論のなかでもっとも広範囲に及び、複雑な内容をもち、かつ重要なものが「まれびと」論であろう。このことは諸論文を『古代研究』国文学篇にまとめるときに、「まれびと」論である「国文学の発生（第三稿）」を冒頭においたことからも窺えよう。それは「まれびと」という文化分析の指

標と概念をもつことによって、折口は日本人の神や精霊の信仰、文学や芸能の発生、年中行事の構成など、広範囲に及ぶ事象が構造化でき、包括的に捉えることが可能と考えたからである。また、「まれびと」論はこうした内容をもつためか、民俗学事典の類ではこの用語は立項されてなく、術語としては必ずしも定立されているとはいえない。

ここでは折口の「まれびと」論そのものを詳述しないが、概括的にいうならこの理論は三段階のモデルをもって構成されている。第一次モデルは「ほかひびと」の存在とその位置づけである。「ほかひびと」は、大きく権力をもった民族に同化しなかった先住民の落ちこぼれで、自分たちの神を奉じて無籍者になった亡命の民であり、この人たちは各地を巡りながら呪言とか寿詞、神業を行う巡遊伶人であるという。そして、第二次モデルが、この「ほかいびと」と海彼の常世からの来訪神信仰を結びつけた理論で、常世神が定期的に訪れ来て呪言や寿詞などを述べることで幸いをもたらすというモデルである。さらに海彼の常世からの来訪神としての「まれびと」は、人々が内陸部に移り住み、沿海から離れることによって山から訪れるという観念が生まれ、これによって「鬼」や「翁」が成立するという。これが第三次モデルである。[21] こうした三段階のモデルは、一方では「常世」という他界観と不可分の関係にあり、来訪神としての「まれびと」の性格は祖霊論とも連続し、さらには山からの「まれびと」と里人とが行き会う場としての「市」やそこでの経済行為（交易）なども、「まれびと」論の範疇に入っている。

折口の「まれびと」という用語の初出は、大正十年（一九二一）夏に第二回目の沖縄民俗採訪の後に書かれ、大正十三年（一九二四）六月に刊行された「呪言の展開—日本文学の発生その二—」[22]である。この論文の「二」の初めに「新築の室ほぎに招いた正客は、異常に尊びかしづかれたものである」と述べ、「万葉集」巻十一の「新室を踏静子が手玉鳴らすも。玉の如照りたる君を　内にとまをせ」には「家々を訪れた神の俤は見えるではないか」とし、さらに「万葉集」巻十一の別の新室の歌、「日本書紀」にある允恭天皇の皇后の室ほぎの例などをあげて説明した後で

> まれびとなる語が、実は深い内容を持つて居るのである。室ほぎに来る正客は稀に訪ふ神の身替りと考へられて居たのである。恐らくは、正客が、呪言を唱へて後、迎へられて宴の座に直つたものであらう。

という。このあとで石垣島のアンガマ、マユンガナシ、ニイルピトを例示している。こうした論述の流れからうかがえるように、「まれびと」論は「万葉集」などの古典研究から構想され、それを沖縄の民俗事例などから実像化しているのである。こうした古典から理論構想を立ち上げ、それに民俗事象を結びつけて実体化するというのが、折口民俗学の方法の一つである。

右の論文に先立って、大正十三年（一九二四）四月の「日本文学の発生」では「神が時を定めて、邑々に降つて、邑の一年の生産を祝福する語を述べ、家々を訪れて其家人の生命・住宅・生産の祝言を聞かせるのが常である」という。ここには「まれびと」という用語はないが、来訪する神に言及しており、大正十二年（一九二三）から十三年（一九二四）にかけて構想ができたといえる。

「まれびと」論は、この後一気に進んでいくが、柳田は折口に先んじて、明治四十四年（一九一一）に『人類学雑誌』二十七巻一号から五号に五回にわたって連載する「踊の今と昔」の（三）で、少年の頃に利根川辺で見た小念仏踊は踊躍念仏に由来淵源すると考えられ、「（一）此風習は多分漢神の信仰と共に輸入せられし外来のものなるべきこと、（二）今日の所謂特殊部落の多くは此風習と大なる生活上の関係を有せしことを仮定するに至れり」と述べている。この論文は芸能史を説くもので、文献資料から多くの具体例をあげて踊りの目的、流行の経緯などを分析したものだが、ここで御霊信仰の種を蒔いたのは「多くの場合に於ては長和元年の設楽神又は天慶八年の八幡神などと共に所謂常世の神の渡来せし者にて、之を担ぎまはりしは当時の平民より稍悧巧なりし帰化の巫覡等なりしならん」と述べている。

その当否はここでは問わないが、柳田は踊りの起源を信仰に求め、ここで「常世の神」の渡来を言うのである。柳田がいう「常世の神」は、設楽神、八幡神と一緒にというので、これは海外からの外来神という意味合いで、折口がいう「常世神」とは一致してないが、外来の神を「常世の神」と表現したことは注目できる。

柳田の「常世の神」からの示唆については確証はないが、大正十年（一九二一）の新聞連載「海南小記」[23]からは、明らかに影響を受けている。「海南小記」は、大正九年（一九二〇）十二月からの奄美そして沖縄、八重山をめぐる長い旅の見聞記で、東京朝日新聞に「海南小記」として連載する。その二十九には「二色人」（大正十四年刊『海南小記』では二十七）と題して、海際のナビントウと呼ぶ崖の岩屋から、毎年六月穂利

折口信夫が柳田の新聞連載「海南小記」を綴じた冊子
（國學院大學折口博士記念古代研究所蔵）

（ぷーり）祭の二日目の暮方に、「赤又黒又の二神」が出現して、宮良の家々を巡ってあるく。二色人は前盛の家では、言う詞は一定しているが、その他の家々ではいろいろで、不幸のあった家では慰め、無事の家では激励し、いずれの家でも次年を言祝ぎ、豊かであることをいう。これが初春の春駒、鳥追などの祝人と違うのは、単に家主が跪いてその受け答えをするだけではなく、「彼等はこれを直接に神の御詞と信ずるがゆえに、いかな事があっても村外の者に、その文句を知らしめぬ」と記している。そして、この神は「また果て知らぬ海原から、天に続いた地平線の向うから、安々とその小舟を島の渚に漕ぎ寄せることを得たのである」と説明する。柳田は、石垣島・宮良のアカマタ、クロマタを、海彼から来臨する神で、この神が家々を言祝ぎ、これを「神の御詞」というのであり、これはまさに折口がいう「まれびと」の内容である。

この後、折口が「まれびと」と「常世」を関連づけて説く大正十四年（一九二五）四月の「古代生活の研究—常世の国—」では、

まれびとの最初の意義は、神であつたらしい。時を定めて来り臨む神である。大空から、海のあなたから、或村に限つて、富みと齢と其他若干の幸福とを齎して来るものと、村人たちの信じてゐた神の事なのである。（『古代研究』民俗学篇一、「全集」2）

という。そして柳田は、大正十五年（一九二六）一月の「雪国の春」[24]で、石垣島のアカマタ・クロマタを本土の、小正月に子どもが行うタビタビ、トビトビ、ホトホト、コトコトと結びつけ、同類の行事であると位置づける。「神の祝言を家々にも

たらす目的は則ち一つで」、「福島宮城では之を笠島とも茶せん子とも呼」び、「それが今一つ北の方に行くと、却つて古風を存することは南の海の果に近く、敬虔なる若者は仮面を被り藁の衣裳を以て身を包んで、神の語を伝へに来るのであつて」これをナマハギ、ナゴミタクリ、ヒカタタクリとも称すると説明している。

折口が、大正十四年（一九二五）一月から執筆を始めて昭和二年（一九二七）十月に書き終えるが、柳田が雑誌『民族』への掲載を拒否し、後に昭和四年（一九二九）一月に同誌四巻二号に掲載される「常世及び『まれびと』[25]」では、四「初春のまれびと」で、正月の門付けの他に、柳田から得た「ほとほと」などの知見をあげている。折口は昭和三年（一九二八）三月の「翁の発生」（『民俗芸術』一巻三号、『古代研究』民俗学篇一、「全集」2）の「12　春のまれびと」では、

柳田國男先生の「雪国の春」は、雪間の猫柳の輝く様な装ひを凝らして、出ました。私どもにとつては、真に、春のまれびとの新しいことぶれの様な気がします。殊に身一つにとつて、はれがましい程の光栄に、自らみすぼらしさの顧みられるのは、春の鬼に関する愚かな仮説が、先生によつて、見かはすばかり立派に育てあげられてゐた事であります。此、真に、世の師弟の道を説く者に、絶好の例話として提供せらるべき事実であります。実の処、をこがましくも、春の鬼・常世のまれびと・ことぶれの神を説いてゐる私の考へも、曾て公にせられた先生の理論から、ひき出して来たものでありました。南島紀行の「海南小記」（東京朝日発表、後に大岡山書店から単行）の中に、つゝましやかに、言を幽かにして書きこんで置かれた八重山の神々の話が、其であります。

と、柳田からの学恩をいい、「学説と言ふものは、実にかくの如く相交錯するものでありまして」と理論形成のあり方を説明している。折口は「翁の発生」で、この引用文の後で、大正十三年（一九二四）初春の東京朝日新聞に掲載された東北の「なもみ剥げ」をあげ、この「春のまれびとに関する報告」は「先生の論理を馬糞紙のめがふおんにかけた様な、私の沖縄のまれびと神の仮説に、ぴつたりしてゐるではありませんか」といい、さらに「なもみ剥げ」は、「畏と敬の両方面から仰がれてゐる異形身の霊物（モノ）があつたのだ」、「私はやがて、其なもみの有無を問うて来る妖怪の為事が、古い日本の村々にも行はれ

てゐた、微かな証拠に思ひ到りました。かせ・ものもらひに関する語原と信仰とが其であります。此事は、其後、多分、二度目の洋行から戻られたばかりの柳田先生に申しあげたはずであります」と、東北の異形身の来訪神については、大正十二年（一九二三）九月頃に柳田に話していたのである。また、「「雪国の春」を拝見すると、殆ど春のまれびと及び一人称発想の文学の発生と言ふ二つに、焦点を据ゑられてゐる様であります」と、柳田の考え方を忖度している。

戦後に行われた石田英一郎の司会による柳田と折口の対談「日本人の神と霊魂の観念そのほか」[26]では、「まれびと」論をめぐって両者が対立し、柳田は「いい機会だから折口君のマレビトといふことについて、一つ研究してみたいと思ひます。あなたも研究してゐる。私も書かれたものを注意して来てゐるが、私の学問の面にはさうはつきりしたものが出て来ない。」と、「まれびと」論に懐疑的で、しかも柳田は「いい機会だから、あなたがマレビトといふことに到達した道筋みたいなものを、考へてみようぢやありませんか。これはかなり大きな問題と思ひますから」と、折口を挑発している。

柳田は、「海南小記」の「二色人」以来、大正期には初春に家々を来訪する神が存在し、この神が神の詞、祝言をもたらすことを認めている。折口はこれを援用しながら「まれびと」論を補強しているのであるが、戦後の対談では、柳田は折口の「まれびと」論に疑義をはさんでいる。一方、当の折口は昭和二十五年（一九五〇）二月に、國學院大學発行の『本流』創刊号に掲載された「日本芸能史序説」（「全集」21）では、村に訪れる来訪神は本来、野山の精霊であったのではと、昭和四年（一九二九）「常世及び「まれびと」」（「国文学の発生」第三稿）での「まれびと」祖霊論の再検討を始めている。

五、折口民俗学検証のいくつかの課題

折口信夫の民俗学について、三点に絞って柳田國男からの示唆、あるいは柳田との交錯を見てきたが、ここにあげた以外にも、たとえば日本の物語に通底するモチーフとして折口は貴種流離譚という分析指標と概念を提示している。折口は、大正七年八月から十月に『土俗と伝説』一巻一号から三号に連載する「愛護若」に「貴人流離」「貴人流離譚」という用語を使って浄見原天皇や億計・弘計王などの流離をいい、大正十三年（一九二四）十月の「叙事詩の撒布（上）—日本文学の発生その四—」（「全集」1）で「貴種流離譚」を使っている。『源氏

物語』の光源氏なども例にあげるのであるが、ほぼ同じことを柳田は大正九年（一九二〇）七月に「流され王」[27]を『史林』五巻三号に書き、異国神渡来や貴人流寓の伝説などを取り上げている。

柳田の「流され王」と折口の「貴人流離譚」「貴種流離譚」もほぼ同じ年代に構想されるのであり、両者の論述を検証する必要があろう。折口と柳田の学問をめぐっては、こうした文化理論に加え、たとえば両者とも大正九年（一九二〇）・十年（一九二一）という、同じ年代に沖縄を訪れ、沖縄文化論を進めており、その位置づけについても対比しながら検討する必要がある。さらには、折口、柳田ともに海外の研究を取り込んでおり、その具体相の検証も行わなくてはならない課題である。

本稿の最後に、折口信夫の海外理論の摂取について若干触れておく。最初にあげた『古代研究』民俗学篇二の「追ひ書き」には、折口がその理論を取り込んだと思われる海外研究者の名が何人か出てくる。その一箇所を引用すると、次のようにある。

> 蓋然の許されてゐる、哲学的の思索を改めて、実証化したぶんと等の研究が、常に、正しい結論に達してゐるとは云へない。やはり、論理に、飛躍が含まれてゐる。知識と経験との融合を促す、実感を欠いた空想が、多く交つて居る。われわれには其が、単なる弁証にしか過ぎなく思はれる事さへある。東海粟散の辺土に、微かな蟇の息を吐く末流の学徒、私如き者の企てを以てしても、ふれぃざぁ教授の提供した証拠を、そのまま逆用して、この大先達のうち立てた学界の定説を、ひつくり返すことも出来さうな弱点を見てゐる。（「全集」3）

「ぶんと」（ウィルヘルム・ヴント、Wilhelm Maximili Wundt）、「ふれぃざぁ教授」（J.G.Frazer）が出てくるのであるが、ここでは海外の民族心理学者、民族学者への批判を行い、自らの学問の自立を宣言しているような印象の文章である。こうした批判が奈辺にあるのかなど、具体的な検証が必要となるが、折口は独自の学問を求めるなかで、海外理論を取り込んでいたことは確かである。

たとえば、折口の霊魂論や王権論を構成する「外来魂」理論は、先のヴントの民族心理学[28]が説いている霊魂信仰を「身体魂」と、死者だけでなく生者にも存在する「映像魂」の二つで捉えるという考え方をヒントに、沖縄のマブイ観によって実体化し

たものであるし、ヴントがいう霊魂と神信仰の関係を霊魂信仰から神信仰へと進んでいくという進化論的把握も折口には見られる。また、祖先の表象がトーテミズムにつながり得るというパラダイムや「他界表象」という他界認識に対する問題意識も、ヴントからの影響と考えられる。[29]

また、折口は「民俗学」そのものの説明を昭和九年（一九三四）六月刊の『日本文学大辞典』第三巻に書き（「全集」19所収）、ここで週期伝承、階級伝承、造形伝承、行動伝承、言語伝承という民俗の五分類を示す。この分類は何度か書き換えられるのであるが、[30]このうちの造形伝承については、昭和二年（一九二七）四月刊のチャーロット・ソフィア・バーン編著・岡正雄訳『THE HANDBOOK OF FOLKLORE　英国民俗学協会公刊　民俗学概論』（岡書院）からの影響が明らかに見られる。[31]

このように折口民俗学の形成論には、残された課題は多いのであるが、折口は自分の民俗学の研究法については、昭和十年（一九三五）七月三十一日から八月三日にかけて行われた日本民俗学講習会での講演「地方に居て試みた民俗研究の方法」（「全集」19所収）で述べている。それは、一つには「沖縄なら沖縄、壱岐なら壱岐の島を全部採集してあるかなければならぬと言ふ焦慮にばかり駆られて、どうもうまく行かなかつた」といい、特定地域の所謂民俗誌的研究をあげている。そして、もう一つは沖縄の民俗研究を述べるなかで、「私として、一番いけないところは、比較が比較で終らずにまう一つ上に、目的を据ゑる—謂はゞ、日本人の発足点なる古代に研究題目を置いてゐる事であつた。比較研究が行はれるか行はれないかの先に、直ちに古代の知識は迎へに来てしまつて、古代研究やら現代観察やら、訣らなくなることが多かつた」といい、民俗事象の比較研究をあげる。民俗の比較研究法は、柳田の論述においては随所に具体的に示されており、これによって列島文化の位相（地域差）と民俗の変遷過程が明らかにされている。近年の日本民俗学の動向としては、とみにこの比較研究法が後退しており、民俗学の独自性が失われつつあるように思える。それによって列島文化の位相が主張できなくなっており、改めて、折口や柳田が主張し、実践した比較研究法の重要性を認識する必要があろう。この方法は、折口は柳田から学んだ方法であり、最初に取り上げた「三郷巷談」でも類例をあげての分析を行っている。最後に、この稿の目的としたことについては、以上のように、まだいくつも課題が残されていることを明記しておく。

注

（1）折口信夫は、昭和五年（一九三〇）六月刊の『古代研究』民俗学篇二（新版『折口信夫全集』3）の「追ひ書き」で、柳田國男の学問との出会いとこれによって「私の心に、一道の明りのさす事を感じたのである」といい、さらに「其は、新しい国学を興す事である。合理化・近世化せられた古代信仰の、元の姿を見る事である」と述べている。柳田の民俗学を自分の研究に取り込むことで「新しい国学を興す事」をめざしたのである。

（2）柳田が農政学から民間伝承研究へと軸足を移すことについては、牛島史彦は「農政論と民俗学の両方を包摂する彼の学問課題は「国民主体の確立」であった」のであり、農政学の挫折、民俗学への転向ではないという見解を示している（牛島史彦『柳田國男の国民農業論』農山漁村文化協会、平成二十三年△二〇一一▽十月）。

（3）柳田國男「踊の今と昔」は『柳田國男全集』18（ちくま文庫、平成二年△一九九〇▽六月）所収、「「イタカ」及び「サンカ」」は『柳田國男全集』4（ちくま文庫、平成元年△一九八九▽十月）所収、「所謂特殊部落ノ種類」は『柳田國男全集』4所収。

（4）「自撰年譜（二）」は、短歌文学全集『釋迢空』（第一書房、昭和十二年△一九三七▽一月）に「釋迢空年譜」として附されたもので、『折口信夫全集』36に収録されている。

（5）ある神の氏子がもつ身体的特徴については、その後、柳田國男も研究対象とする。柳田は大正五年（一九一六）の『郷土研究』四巻八号に「一眼一足の怪」、同四巻九号に「片足神」、大正六年（一九一七）の四巻一一号に「片目の魚」、四巻一二号に「一つ目小僧」を書き、同年八・九月には東京日々新聞で「一つ目小僧の話」を連載する。「一つ目小僧の話」では、御霊信仰と氏子や贄の身体的特徴が論じられており、この柳田の視点は、折口の「三郷巷談」からの示唆という可能性もある。

（6）ここでは五大力菩薩の信仰伝承はあげていないが、この信仰については『郷土研究』第一巻第五号に南方熊楠が「五大力菩薩」を、同じ巻号に出口米吉が「五大力のカンザシの形」を書いている。

（7）『古代研究』民俗学篇二（『全集』3）では「らつぱを羨む子ども」という題がつけられている。

（8）拙稿「折口信夫「三郷巷談」の意趣」『口承文芸研究』三二号、平成二十一年△二〇〇九▽三月

（9）柳田國男『故郷七十年』（昭和三十四年△一九五九▽十一月、『定本柳田國男集』別巻三所収）の「嫁盗み」の項で、「私はこの報告を読んでハッと思ひ、大変学問が進んだやうな気がしたので折口君に御礼をいつたものであつた」といい、その理由の二つ目に折口が報告した経済的理由をあげている。

（10）前掲（9）このことは「嫁盗み」の項の冒頭で「折口君の報告はたしかこんな話であつた」として、続いて引用のように言っている。

（11）池田弥三郎『私説折口信夫』中公新書、昭和四十七年（一九七二）八月

（12）折口信夫「自撰年譜（一）」『現代短歌全集第十三巻　釋迢空集』改造社、昭和五年（一九三〇）九月（『全集』36所収）

（13）折口の「標山」「依代」論については、拙稿「神去来観念と依代論の再検討」（小川直之編『折口信夫・釋迢空―その人と学問―』おうふう、平成十七年△二〇〇五▽四月）、拙稿「「依代」の比較研究」（神奈川大学国際常民文化研究機構『国際常民文化研究叢書7―アジア祭祀芸能の比較研究―』平成二十六年△二〇一四▽十月）を参照願いたい。

（14）福原敏男「折口信夫依代論の原点―髭籠と傘鉾―」（植木行宣・福原敏男著『山・鉾・屋台行事　祭りを飾る民俗造形』岩田書院、平成二十八年△二〇一六▽九月）では、折口の依代論を検討、検証するに

あたっては「髯籠の話」「だいがくの研究」「盆踊りと祭屋台と」を対象としているが、この折口理論が「標山」論と「依代」論の二つからなることは重視していない。

（15）池田弥三郎『私説折口信夫』（中公新書二九五、昭和四十七年＜一九七二＞八月）の「髯籠の話を中心に」の章。

（16）「髯籠の話」の掲載をめぐるプライオリティーについては、前掲（13）の拙稿でも触れた。

（17）福田アジオ『日本の民俗学―「野」の学問二百年―』（吉川弘文館、平成二十一年＜二〇〇九＞十月）でも「『郷土研究』の創刊と本格的活動の開始」の章に「折口信夫の登場」の節を設け、「髯籠の話」の掲載をめぐるいきさつを、折口からの投稿原稿を「読んだ柳田が内容の優れていることに驚き、生来の負けん気から、ほぼ同じテーマでかねて考えていた内容を急いで執筆し、それを三巻一号に掲載し、折口の「髯籠の話」の若干の字句を挿入して、翌月号に掲載したのではなかろうか」と推測している。福田がいう「ほぼ同じテーマ」が何であるかは分からないが、この辺は「標山」論なのか、「依代」論なのか、はっきりさせる必要がある。また、福田は、柳田は「神を招く柱や樹木を示す用語を提示しなかった」と指摘しているが、本文中で示したように、手草であるススキやアシには「依坐」「神代」という用語を提示している。

（18）これは諏訪春雄『折口信夫を読み直す』（講談社現代新書、平成六年＜一九九四＞十二月）が指摘する通りである。

（19）柳田國男「しだれ桜の問題」は、『信州随筆』（山村書院、昭和十一年＜一九三六＞）に収録される。（『柳田國男全集』24、ちくま文庫、平成二年＜一九九〇＞九月）

（20）柳田の「しだれ桜の問題」をめぐっては、拙稿「柳田國男・折口信夫と三遠南信」（『伊那民俗研究』20号、柳田國男記念伊那民俗研究所、平成二十五年＜二〇一三＞五月）を参照頂きたい。

（21）拙稿「折口信夫の「まれびと」論」『東アジア比較文化研究』4、東アジア比較文化国際会議日本支部、平成十七年（二〇〇五）6月

（22）折口信夫「呪言の展開―日本文学の発生その二―」（『日光』一巻三号、大正十三年＜一九二四＞六月）が『古代研究』国文学篇に収録された「国文学の発生　第二稿」となる（「全集」1）

（23）大正十年（一九二一）三月二十九日から東京朝日新聞に「海南小記」と題して、五月三十日までに三二回にわたって連載される。後に大正十四年（一九二五）四月に『海南小記』（大岡山書店）として出版される。『柳田國男全集』1（ちくま文庫、平成元年＜一九八九＞九月）所収

（24）柳田國男「雪国の春」『婦人の友』二〇巻一号、大正十五年（一九二六）一月、『柳田國男全集』2（ちくま文庫、平成元年＜一九八九＞九月）所収

（25）折口信夫「常世及び「まれびと」」（『民族』四巻二号、昭和四年＜一九二九＞一月）が、『古代研究』国文学篇の「国文学の発生　第三稿」となる（「全集」1）

（26）昭和二十四年（一九四九）十二月の『民族学研究』第十四巻第二号に掲載。「全集」別巻3所収

（27）柳田國男「流され王」は『一つ目小僧その他』（小山書店、昭和九年＜一九三四＞六月）に収録される。『柳田國男全集』6（ちくま文庫、平成元年＜一九八九＞十二月）所収

（28）桑田芳蔵『霊魂信仰と祖先崇拝（民族心理学的研究）』（心理学研究会出版部、大正五年＜一九一六＞十月）や桑田芳蔵『ヴントの民族心理学』（改造社、大正十三年＜一九二四＞三月）

（29）佐藤深雪は、「ウィルヘルム・ヴントと折口信夫」（『國學院雑誌』九四巻一一号、昭和五十一年＜一九七六＞八月）で、「折口がヴントの

民族心理学から受けた影響としては、「よりプリミティヴな時代の霊魂の分化という考え方」、身体魂への恐怖心などがある」と指摘する。

(30) 和田正洲「造形伝承論」（日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系』第五巻造形伝承、國學院大學、昭和五十九年〈一九八四〉で、折口の民俗分類が論じられている。

(31) このことについては、拙稿「折口信夫の造形伝承論」（南山大学人類学研究所『人類学研究所　研究論集』第2号、平成二十七年〈二〇一五〉三月）で具体的に示した。

*折口信夫の著作は、新版『折口信夫全集』（中央公論社）に拠る。必要に応じて初出等を示したが、引用は「全集」巻数を略記した。